

強いバラのやさしさ

ノイバラにはよく悩まされた。池であれ川であれ、水面に近づこうとするときに、しばしば進路を阻むのがノイバラである。細長く密生した枝には、絶妙な位置に鋭い棘が配置され、その枝を払いのけて進もうとする者の皮膚に、無数のひっかき傷を負わせずにはおかない。

習性として、水面に近づかねばおれない身ではなくても、生活の一端が山野にある者にとって、ノイバラは厄介な存在なのだ。だから、人の生活空間に無断で進出したノイバラは、敵意をもって刈り取られる。

しかし、根本から刈り取っても、いつの間にか元通り、あるいはそれ以上に茂っているのがノイバラなのだ。ノイバラは強い。人智と機械力をもってすれば、何でもできると思い上がっている人類の鼻っ柱を、いとも簡単にへし折るだけの力がある。

繊細で壊れやすいが故に武装する、というならまだわかる。強いうえに全身を武装し、近づく者に傷を負わせるとは何事か。長いあいだ、そんなふうにならぬようにノイバラをみていた。

栽培されているバラも、基本的にはノイバラのような野生種と同じ性質を受け継いでいる。剪定する時期を選ばないし、強剪定にも耐える。品種によっては、地獄の針の山をほうふつとさせる棘をたくわえている。花と、その香りがなければ、悪魔の植物と呼ばれていても不思議ではない。

あるとき、ノイバラの棘に鳥の羽が引っかかっているのを見た。腹部あたりの柔らかい羽毛が、かたままって引っかかっている。その様子から想像すると、何かに驚いて、あわてて飛び立って、ノイバラの棘にかかってしまったのだろう。おびえて身を隠していた小さな生き物をも、守ってやるどころか傷つけてしまうのだ、バラというやつは。

そのとき、ふと思った。もっと小さな生き物がいる。小鳥にさえ襲われて命を落とす生き物だ。たとえば昆虫である。昆虫なら針の山のような棘も危険なものではない。

バラはたくさんの花を咲かせ芳香を放つ。それに誘われるのは、おそらくは昆虫である。昆虫が集まれば、それを食べる鳥にとって良い餌場になる。だからバラは、受粉を助けてくれる昆虫を捕食者から守るために棘を備えているのではないだろうか。もちろん葉を食べている昆虫をも守ることになるのだが、植物は自身の一部を食べられることに関して寛容である。そうでなければ、陸上にこれだけ多くの動物が闊歩できるわけがない。

バラが棘を備える本当の理由を私は知らない。しかし、根本からへし折られても元通りに復活できる強さをもったバラが、自分自身だけを守るために多くの棘を必要とするだろうか。それは、より弱い他者を守るために必要なのではないだろうか。そう思ったとたんに、バラに対して申し訳なく感じた。私はバラを誤解していたに違いない。バラのやさしさに気づけなかったに違いない。

かわい小さな生き物をたたき落とし、踏みつけ、ひねりつぶしておきながら、知らぬ顔で通り過ぎようとする者に、「弱い者をいじめるな。踏みつけにするな」と、バラは棘で抗議する。自分が憎まれ、枝をへし折られようとも。

(2011年8月27日)

(2011年11月29日、一部訂正)